

<研究報告>

母親役割意識と影響要因 —産科退院前と月齢1ヶ月時の調査を通して—

山本美佐子* 松島可苗*、堀込和代**、水嶋禮子***

要約：本研究は、母親の内的側面に焦点を当て、産科退院前と子どもの月齢1ヶ月時の母親意識、対児感情を中心にそれらに関連する諸要因について検討し、以下の結果が得られた。

- 1) 産科退院前、月齢1ヶ月時ともに、母性意識と対児感情は高い相関 ($P < 0.01$) が見られ、母親役割を受容し育児肯定意識の高い母親は、子どもに対する接近感情も高く、回避感情は低い傾向にあった。また、母親の葛藤意識と成長志向意識は育児肯定意識と負の相関が見られ ($P < 0.01$)、葛藤意識と成長志向意識は正の相関 ($P < 0.01$) が見られた。
- 2) 妊娠期の身体変化に伴う母親としての実感の高まりと夫の反応は、母性の育児肯定意識や子どもへの接近感情と高い相関が見られた。 ($P < 0.01$)
- 3) 月齢1ヶ月の子どもの状況では、子どもの睡眠が母親意識と対児感情に強い関連 ($P < 0.01$) が見られ、子どもへの声かけや関わりも対児感情と相関 ($P < 0.05$) が見られた。
- 4) 母親としての自分と社会的存在としての自分の間での葛藤が強い場合は、妊娠期にも妊娠を負担に思う気持ちが強く ($P < 0.01$)、出産後の子どもへの回避感情も強くなる ($P < 0.01$) 傾向が見られた。また、母親の疲労感は育児否定意識と葛藤意識に影響を与えていた。
- 5) 退院前と月齢1ヶ月時では、葛藤意識が有意に ($P < 0.05$) 高くなり、成長志向意識、対児感情はやや減少が見られた。

キーワード：母親意識、葛藤意識、対児感情、妊娠感情

I. はじめに

子どもの養育環境として、育児不安や育児困難、子ども虐待などが社会問題化し、多くの調査・研究や支援が行政・医療・保健の分野でなされてきている。

育児においては、従来の母親中心から父親の重要性や、父性・母性ではなく親性・次世代育成力等の概念が論議されるようになった¹⁾。父親の育児参加を支援するための育児休暇も認められてきているが、現実には依然として社会の価値観には、育児は母親中心という考えが強く、母親にかかる期待と負担は大きい。そして、近年

の育児を取り巻く社会環境の変化(少子化、核家族化、女性の社会進出の増加など)は、母親に対して育児の重圧感や葛藤をより深めているといえる。²⁾³⁾⁴⁾

女性の親としての役割は、妊娠・分娩での身体的変化とともに母親となる準備期間を経過し、出産後の育児行動を通して子どもとの直接的な相互作用により発達変容していく。育児は、母親の行動として現れるが、行動そのものだけでなく、その背景にある意味や行動に繋がる要因として、母親自身の内的側面に注目する必要がある。また、子どもは日々成長・発達しており、育児もその成長・発達に応じて変化する。同様に、母親の内的側面もそれに影響を受けると考えられ縦断的調査による研究が必要とされる。

本研究は、母親自身の内的側面(母親意識・対児感情)に焦点を当て、これらの経時的変化とそれに関連す

*看護学科 母子看護学講座

**群馬県立医療短期大学看護学科

***大宮医師会看護専門学校

る要因を明らかにすることを目的として、産科退院直前（第1回調査）と子どもの月齢1ヶ月（第2回調査）、3ヶ月（第3回調査）、8ヶ月（第4回調査）、12ヶ月（第5回調査）までの1年間の縦断的調査を行った。

尚、本研究は、母親の社会的志向と現実（育児中心）との葛藤に重点をおくために、従来の母性意識を育児肯定・育児否定・葛藤・成長志向項目に分類した繁多²⁾の尺度を取り入れた。

今回は、第1回調査と第2回調査について報告する。

Ⅱ. 研究目的

- 目的1：産科病院の退院前の母親意識・対児感情を把握し、それらに関連する要因を明らかにする。
- 目的2：子どもの月齢1ヶ月における母親意識・対児感情を把握し、それらに関連する要因を明らかにする。
- 目的3：退院前と子どもの月齢1ヶ月での母親意識・対児感情の変化とそれらに関連する要因を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

本研究は、自記式質問紙を第1回は直接手渡し、2回目以降は郵送による調査法を用い、以下の要領で実施した。

1. 調査対象

群馬県前橋市にある2つの民間の中規模総合病院で出産（里帰り分娩者含む）し、本研究の趣旨を理解し、郵送による継続調査に同意した母親を対象とした。月平均分娩件数25例のA病院には70名、17～18例のB病院には50名の計120名に配布した。

2. 調査方法

<第1回調査>

産科病棟退院前に研究の趣旨を説明し、承諾を得た母親に調査用紙を配布。

配布期間；H11年6月23日～12月26日

<第2回調査>

第1回調査用紙に住所氏名を記入して回収できた母親に、子どもの月齢1ヶ月頃をめぐりに第2回調査用紙を順次郵送した。

配布と回収期間；H11年8月2日～H12年1月末

3. 調査内容

質問項目は、繁多²⁾が花沢（1983）大日向（1982）の先行研究を参考に作成した①対児感情を測定する項目（18項目）と②母性意識を測定する項目（16項目）を中心に作成した。そのほか③年齢や職業家族構成などのフェイスシート、④母親自身の健康状況は、第1回調査か

ら第5回調査まで、すべてに用いた。その他、第1回調査には妊娠中の気持ち（妊娠感情）に関する10項目と出産直後の気持ち（出産感情）に関する10項目を、第2回調査には夫の存在4項目と子どもの状況に関する6項目を独自に作成して追加した。また、夫以外の相談者の存在についても項目をもうけた。

対児感情・母親の健康状況は「非常にそのとおり」から「そんなことはない」を4点～1点までの4段階に、母親意識・妊娠感情・出産感情は「全くそのとおり」から「全くそうでない」を6点～1点までの6段階に分けて得点化した。

4. 統計解析・分析手順

回収した質問紙から未回答項目が2個以上あるものは、無効回答とし、分析対象者から除外した。1項目の欠損値に関しては、該当するカテゴリーの本人の平均値を当て、補正した。繁多は①の対児感情を接近項目（11項目）と回避項目（7項目）に、②母親意識は育児肯定項目（5項目）、育児否定項目（3項目）葛藤項目（5項目）成長志向項目（3項目）に分類しており、本調査においてもこの分類を用いた。第1回調査で独自に作成した妊娠中の気持ちに関する項目と出産直後の気持ちに関する項目は、因子分析し、母親意識・対児感情・母親の特性などとの関連を分析した。同様に第2回調査での子どもの状況に関する項目も因子分析後分類し、関連を分析した。研究目的3では、時期別変化を明らかにすることが目的であるため、第1回調査・第2回調査ともに有効回答となった母親を対象とし、対応のあるt検定を行った。尚、統計学的処理には、統計ソフトSPSS11.0Jを用いた。

Ⅳ. 結果

結果は、研究目的にそって述べる。

<研究目的1>

1. 対象者の特性

第1回（退院前）の回収はA病院58名、B病院41名の計99名（83.5%）であったが、未記入項目が2個以上あるものを無効回答とし、分析対象者は95名であった。

母親の平均年齢は28.9歳（最小20歳、最大40歳、SD 4.67）で、有職者は、常勤14名、自営業5名、非常勤・パート3名、学生1名の合計23名（24.2%）、専業主婦72名（75.8%）であった。出産経験は初産41名（43.2%）2回目40名（42.1%）、3回以上14名（14.7%）で、子どもの性別は、男児45名（47.4%）女児50名（52.6%）であった。家族形態は核家族が76名（80.0%）であった。

健康に関する自覚では、全般的な健康自覚は「良好・まあ良好」と回答した母親は89名（93.7%）「あまりすぐ

表1：妊娠感情および出産感情の因子分析

質問項目		因子		
		1	2	3
妊娠感情	胎動を感じたときに母親としての実感があった	0.810	-0.067	-0.126
	子どもの物を準備していると、母親としての実感がわいた	0.698	-0.039	0.066
	お腹が大きくなるにつれて母親としての実感が強くなった	0.496	0.196	0.068
	夫は出産の日を心待ちにしていた	-0.032	0.639	-0.040
	妊娠して夫は前より優しくなった	0.044	0.541	0.085
	妊娠したことが嬉しかった	0.052	0.517	-0.197
	妊娠したことによって、自分のやりたいことができなかった	0.078	-0.029	0.839
	妊娠中に気持ちが落ち込んだ	-0.261	0.127	0.428
	お腹の大きな自分の姿がいやだった	0.085	-0.178	0.420
私は出産の日を心待ちにしていた	0.306	0.370	0.097	
出産感情	母親としての責任を感じた	0.909	-0.255	
	充実感があった	0.759	0.128	
	子どもを育てるのは大変だと思った	0.611	-0.390	
	子どもがかわいかった	0.525	0.180	
	私は子どもの誕生を喜んだ	-0.028	0.938	
	ホッとした	-0.167	0.701	
	うれしかった	0.372	0.554	

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

れない」は6名(6.3%)であった。睡眠満足感では「よく眠れる・眠れる」と回答した母親は48名(50.5%)「少しは眠れる・眠った気がしない」は47名(49.5%)とほぼ同数であった。疲労感では「疲れていない・あまり疲れていない」と回答した母親は50名(53.2%)「疲れている・とても疲れている」は44名(46.8%)未記入1名であった。

2. 母親意識・対児感情と妊娠感情・出産感情の関連

独自に作成した妊娠感情、出産感情の因子分析を行った結果、妊娠感情10項目は因子負荷量が低い1項目を削除し、3因子が抽出された。出産感情10項目は因子負荷量が低い3項目を削除し、2因子が抽出された(表1)。この結果より、それぞれの因子に含まれる項目の評定値を合計して、妊娠感情は妊娠実感得点、夫の反応

得点、妊娠負担得点、出産感情は母親自覚得点、出産達成得点とした。母親意識、対児感情、妊娠感情、出産感情の各項目間の相関係数を表2に示した。

3. 母親意識・対児感情・妊娠感情・出産感情と母親の特性・母親の身体自覚との関連(表3)

母親の特性(年齢・職業・出産経験・家族形態)および自覚(健康自覚・睡眠満足感・疲労感)によって母親意識、対児感情、妊娠感情、出産感情の各項目に違いがあるかt検定を行った。その結果、否定点が有意に低かったのは「30歳未満」「母親の疲労感がない」群であった。葛藤得点が有意に低かったのは「母親の疲労感がない」群であり、「30歳未満」群で低い傾向であった。接近得点は「30歳未満」群で

高くなる傾向であった。回避得点が有意に低かったのは「経産婦」「母親の疲労感がない」群であった。妊娠実感得点は「30歳未満」群で高い傾向があり、夫の反応得点は「初産婦」「母親の睡眠感がある」群で有意に高く、妊娠負担得点は「30歳未満」群で高い傾向であった。出産達成得点は「母親の健康状態がよい」群で高い傾向であった。肯定得点と成長志向得点、母親自覚得点に関連する要因はみられなかった。職業・家族形態・母親の健康自覚による各項目の平均点に有意差は認められなかった。

<研究目的2>

1. 対象者の特性

第2回調査(退院後1ヶ月)は1回目に回収できた99名に配布し、回収はA病院47名、B病院35名の計82名

表2：母親意識・対児感情・妊娠感情・出産感情の相関係数(第1回調査)

		母親意識				対児感情		妊娠感情		出産感情		
		肯定得点	否定得点	葛藤得点	成長志向得点	接近得点	回避得点	妊娠実感得点	夫の反応得点	妊娠負担得点	母親自覚得点	出産達成得点
母親意識	育児肯定得点		-0.536**	-0.467**	-0.294**	0.603**	-0.238*	0.586**	0.457**	-0.005	0.386**	0.324**
	育児否定得点			0.644**	0.239*	-0.273**	0.409**	-0.384**	-0.360**	0.103	-0.107	-0.100
	葛藤得点				0.510**	-0.241*	0.317**	-0.225*	-0.297**	0.400**	-0.120	-0.069
	成長志向得点					-0.029	0.099	-0.086	-0.032	0.234*	0.091	-0.055
対児感情	接近得点						-0.008	0.506**	0.527**	0.066	0.550**	0.458**
	回避得点							-0.060	-0.133	0.143	-0.014	-0.021
妊娠感情	妊娠実感得点								0.394**	0.150	0.446**	0.308**
	夫の反応得点									0.025	0.303**	0.448**
	妊娠負担得点										0.261*	0.204*
出産感情	母親自覚得点											0.542**
	出産達成得点											

*p<0.05、**p<0.01

表3：諸属性と母親意識・対児感情・妊娠感情・出産感情の関連-t検定（第1回調査）

		母親意識				対児感情				妊娠感情				出産感情									
		肯定得点		否定得点		葛藤得点		成長志向得点		接近得点		回避得点		妊娠実感得点		夫の反応得点		妊娠負担得点		母親自覚得点		出産達成得点	
		平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値
母親の職業	なし (N=72)	23.06		6.60		12.76		11.90		37.07		10.13		14.97		15.33		11.10		21.49		17.63	
	あり (N=23)	23.78		6.39		12.87		11.72		37.57		11.09		15.70		15.96		11.22		21.00		17.26	
年齢	30歳未満 (N=54)	23.54		6.14	t=1.99*	12.04	t=1.93Δ	11.52		38.00	t=1.73Δ	10.20		15.52	t=1.68Δ	15.61		11.46	t=1.68Δ	21.74		17.52	
	30歳以上 (N=41)	22.83		7.09		13.78		12.29		36.12		10.56		14.66		15.32		10.68		20.88		17.56	
出産経験	初産 (N=41)	23.07		6.39		12.27		11.61		37.24		11.22	t=2.69**	14.88		16.02	t=2.21*	11.12		21.12		17.71	
	経産婦 (N=54)	23.35		6.67		13.19		12.04		37.15		9.70		15.35		15.07		11.13		21.56		17.41	
家族形態	核家族 (N=76)	22.99		6.54		12.82		12.05		36.83		10.33		15.04		15.50		11.00		21.13		17.51	
	核家族以外 (N=19)	24.21		6.58		12.68		11.05		38.63		10.47		15.58		15.42		11.63		22.32		17.63	
健康状態	良い (N=89)	23.22		6.58		12.69		11.84		37.16		10.44		15.10		15.57		11.10		21.49		17.58	t=1.88Δ
	良くない (N=6)	23.33		6.00		14.33		12.00		37.67		9.17		15.83		14.17		11.50		19.50		16.83	
母親の睡眠	眠れる (N=48)	23.77		6.57		12.58		11.77		37.42		9.98		15.31		15.98	t=2.35*	10.83		21.27		17.44	
	眠れない (N=47)	22.68		6.52		13.00		11.94		36.96		10.74		14.98		14.98		11.43		21.47		17.64	
母親の疲労感	疲れていない (N=30)	23.72		6.12	t=1.84Δ	11.70	t=2.53*	11.70		37.90		9.34	t=3.84**	15.22		15.78		10.94		21.70		17.62	
	疲れている (N=44)	22.68		7.00		13.95		12.02		36.48		11.39		15.11		15.18		11.34		21.00		17.48	

Δp<0.10、*p<0.05、**p<0.01

(82.8%)であった。1回目と同様に無効回答を除去し分析対象者は80名であった。平均年齢は29.3歳（最小20歳、最大40歳、SD4.5）と、1回目よりやや上昇が見られた。

健康に関する自覚では、全般的な健康自覚は「良好・まあ良好」と回答した母親は73名（91.3%）「あまりすぐれない」は7名（8.7%）であった。睡眠満足感では「よく眠れる・眠れる」と回答した母親は40名（50.0%）「少しは眠れる・眠った気がしない」は40名（50.0%）と同数であった。疲労感では「疲れていない・あまり疲れていない」と回答した母親は59名

(73.8%)「疲れている・とても疲れている」は21名（26.3%）であった。

子どもの状況では、子どもの栄養形態は、母乳のみ38名（47.5%）、混合栄養42名（52.5%）で、人工栄養のみは0名であった。子どもの食欲では「とても良い・けっこう良い」と回答した母親が80名（100.0%）であった。子どもの睡眠では「よく眠る・けっこう眠る」と回答した母親は63名（78.8%）「あまり眠らない・眠らない」が17名（21.3%）であった。子どもと関わっているとき、子どもが「とても喜ぶ・けっこう喜ぶ」と回答した母親が70名（87.5%）「あまり喜ばない・喜ばない」が7名（8.8%）無記名3名（3.8%）であった。ミルクや泣いているとき以外に子どもを抱くことについて「よく抱く・けっこう抱く」と回答した母親は35名（43.8%）「たまたま抱く・ほとんど抱かない」45名（56.3%）であった。子どもへの話しかけについて「よく話しかける・けっこう話しかける」68名（85.0%）「たまたま話しかける・ほとんど話さない」12名（15.0%）であった。今回の研究対象となった母親は、全

表4：子どもの状況の因子分析

質問項目	因子		
	1	2	3
ミルクや泣いているときいがいに子どもを抱くかどうか	0.942	-0.256	-0.112
子どもに話しかけるかどうか	0.684	0.190	0.300
子どもの食欲	-0.267	0.844	0.017
子どもの睡眠	0.091	0.623	0.091
子どもとかわわっているとき子どもが喜ぶかどうか	0.121	0.183	0.765
子どもは順調に成長していると思うかどうか	0.241	0.453	-0.580

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

表5：母親意識・対児感情・子どもの状況・夫の状況の相関係数（第2回調査）

	母親意識				対児感情		子どもの状況					夫の状況		
	育児肯定得点	育児否定得点	葛藤得点	成長志向得点	接近得点	回避得点	栄養の種類	哺乳状況	児の睡眠	児の喜び	児との関り	夫の協力	夫の存在	
母親意識	育児肯定得点	-0.640**	-0.569*	-0.213	0.509**	-0.459*	0.008	0.204	0.491**	0.169	0.236*	0.044	0.077	
	育児否定得点			0.702**	0.224*	-0.489**	0.588**	-0.074	-0.256*	-0.457**	-0.157	-0.246*	-0.064	-0.116
	葛藤得点				0.364**	-0.395**	0.496**	0.027	-0.181	-0.487**	-0.027	-0.274*	-0.094	-0.098
	成長志向得点					-0.080	0.070	-0.006	-0.026	-0.054	0.090	-0.145	0.115	0.097
対児感情	接近得点													
	回避得点													
子どもの状況	栄養の種類													
	哺乳状況													
	児の睡眠													
	児の喜び													
	児との関り													
夫の状況	夫の協力													
	夫の存在													

*p<0.05、**p<0.01

表6：諸属性と母親意識・対児感情・妊娠感情・出産感情の関連-t検定（第2回調査）

		母親意識								対児感情			
		肯定得点		否定得点		葛藤得点		成長志向得点		接近得点		回避得点	
		平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値	平均点	t値
年齢	30歳未満(N=42)	23.52		5.93		13.48		11.29		38.51	t=1.91△	10.92	
	30歳以上(N=38)	22.45		6.76		14.39		11.76		36.61		10.63	
出産経験	初産(N=34)	22.82		6.24		13.85		11.32		36.93		11.76	t=2.39*
	経産婦(N=46)	23.15		6.39		13.95		11.65		38.10		10.07	
家族形態	核家族(N=64)	22.81		6.27		13.76		11.52		37.54		10.73	
	核家族以外(N=16)	23.81		6.56		14.50		11.50		37.86		11.00	
健康状態	良い(N=73)	23.30	t=1.79△	6.15	t=1.80△	13.71		1.62		37.88		10.63	
	良くない(N=7)	20.00		8.14		16.00		10.43		34.71		12.43	
母親の睡眠	眠れる(N=45)	22.62		6.67		14.46		11.51		37.48		10.84	
	眠れない(N=33)	23.42		5.82		13.03		11.52		37.75		10.61	
母親の疲労感	疲れていない(N=40)	23.93		5.63	t=2.26*	12.90	t=1.81△	11.53		37.93		10.20	
	疲れている(N=40)	22.10		7.03		14.92		11.50		37.28		1.38	
子どもの状況	眠る(N=63)	24.21	t=4.97**	5.76	t=3.68**	13.08	t=2.98**	11.52		38.32	t=2.57*	10.46	t=1.77△
	眠らない(N=17)	18.59		8.41		17.00		11.47		34.94		12.00	
	喜ぶ(N=70)	23.30	t=2.11*	6.30		14.13		11.70		38.02	t=2.11*	10.73	
	喜ばない(N=7)	19.43		7.00		13.86		10.43		34.00		12.00	
	よく抱く(N=35)	23.20		5.74		12.91		11.09		38.84	t=2.00*	10.31	
	あまり抱かない(N=45)	22.87		6.78		14.69		11.84		36.64		11.16	
	よく話しかける(N=68)	23.24		6.19		13.60		11.54		37.93		10.60	
	あまり話しかけない(N=12)	21.75		7.08		15.67		11.33		35.75		11.83	
夫の状況	協力的(N=71)	22.97		6.37		13.94		11.58		38.00	t=2.06*	10.84	
	協力的でない(N=9)	23.33		6.00		13.64		11.00		34.44		10.33	
	頼れる(N=71)	23.15		6.25		13.87		11.65	t=1.68△	38.00	t=2.06*	10.69	
	頼れない(N=9)	21.89		6.89		14.20		10.44		34.44		11.56	

△p<0.10、*p<0.05、**p<0.01

員が母乳栄養を実行し、積極的に話しかけを行っていた。

夫の状況では、「よく協力してくれる・協力してくれる」71名(88.8%)「あまり協力してくれない・協力してくれない」9名(11.3%)であった。夫の存在として

は、「とても頼りになる・頼りになる」71名(88.8%)

「あまり頼りにならない・頼りにならない」9名(11.3%)、夫がいることで頑張れると思うかどうかについて「とても思う・思う」77名(96.3%)「あまり思わない・思わない」3名(3.8%)、夫と話すことで落ち着く

かどうかについて「とても落ち着く・落ち着く」78名(97.5%)「あまり落ち着かない・落ち着かない」2名(2.5%)であった。今回の研究対象となった母親は、夫について協力的かつ存在を肯定的に受け止めていた。

2. 母性意識・対児感情と子どもの状況・夫の状況との関連

独自に作成した子どもの状況についての因子分析を行った。その結果をもとに項目間の相関係数を確認したところ、「ミルクや泣いているとき以外に子どもを抱く」「子どもに話しかける」という項目間の相関係数に有意差がみとめられただけであった。この2項目の合計点を子どもへの関わり得点とした。母性意識、対児感情、子どもの状況、夫の状況の各項目間の相関係数を表4に示した。

3. 母性意識・対児感情と母親の特性・母親の身体自覚・子どもの状況・夫の状況との関連(表6)

母親の特性(年齢・職業・出産経験・家族形態)および自覚(健康自覚感・睡眠満足感・疲労感)子どもの状況、夫の状況によって母性意識と対児感情に違いがあるか検定を行った。その結果、肯定得点が有意に高かったのは、「子どもが眠る」・「子どもと関わっているとき、子どもが喜ぶ」群であり、母親の「健康自覚が良い」群で高くなる傾向であった。否定得点が有意に低かったのは、「母親の疲労感がない」・「子どもが眠る」群であり、母親の「健康自覚が良い」群で低くなる傾向であった。葛藤得点が有意に低かったのは「子どもが眠る」群であり、「母親の疲労感がない」と低くなる傾向であった。成長志向得点では、「夫が頼れる存在」群で高くなる傾向であった。接近得点が有意に高かったのは「子どもが眠る」「子どもと関わっているとき、子どもが喜ぶ」・「夫が協力的」・「夫が頼れる存在」・「子どもをよく抱く」群であり、30歳未満群で高い傾向であった。回避得点が有意に低かったのは経産婦であり、「子どもが眠る」群で低い傾向であった。職業・家族形態・健康自覚・睡眠満足感による各項目の平均点に有意差は認められなかった。

<研究目的3>

1. 対象者の特性

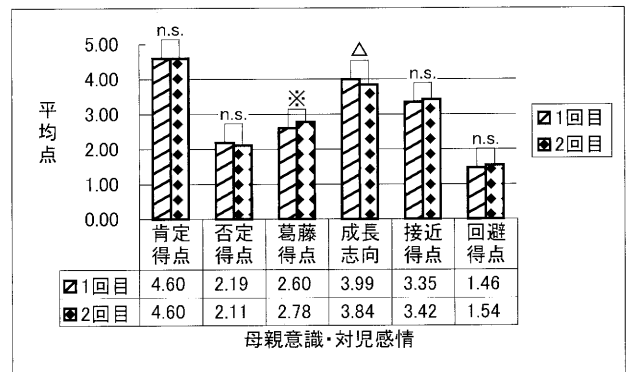
1回目と2回目の連続回答者の80名を対象者とした。

未回収者は20歳代に多く20~29歳の回収率77.8%、30~40歳は92.7%であった。

第1回目と第2回目の母性意識と対児感情の得点に差があるか対応のあるt検定を行った。その結果、葛藤得点は有意に高くなっており、成長志向得点は低く、回避得点は高くなる傾向がみられた(図1)。

V. 考 察

本研究では、母親の出産直後と子どもの月齢1ヶ月時



$\Delta p < 0.10$ * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

図1 1回目・2回目アンケートの母性意識・対児感情の平均点比較—対応あるt検定

の母親役割意識(母性意識)及び対児感情の把握とそれに関連する要因を分析した。母親役割意識は、繁多¹⁾が大日向(1982)の先行研究を参考に作成した尺度を用いた。ここで分類された4因子を、母親役割を受容し育児を肯定的に捉えている<育児肯定意識>、母親役割を受容できず、母親としての自分を否定的に捉えている<育児否定意識>、母親役割を果たす自分と社会的存在としての自分の中で焦燥感を抱き葛藤している<葛藤意識>、親として人間としての自己の成長を求める<成長志向意識>と定義した。これらの意識をもとに対児感情やその他の要因との関連を考察する。本研究では、特に母親の葛藤意識に注目して考察する。

1. 対象の特性と母性意識・対児感情の概観

今回の対象は、育児肯定意識、接近感情が高い集団といえる。退院前、月齢1ヶ月時ともに高い得点を示している。(図1) 地域性とまだこの時期は出産後間もないことが影響していると考えられるが、子どもへの関わりも積極的で、夫の協力も多いことの相乗効果も考えられる。

但し、調査に協力してくれる人々の特徴として、調査目的に関する関心が高く、問題を持つことが少ないことを考慮しなくてはならない。

2. 母性意識、対児感情と妊娠感情との関連

妊娠中の身体の変化に伴う母親としての実感の高まりや夫の肯定的な反応が、母親が出産後の育児を受容し肯定する意識と関連が強いことは、育児準備期間としての妊娠期の重要性をあらためて示唆した。また、同じく出産直後の喜び(出産達成得点)、これから母親になることへの責任と自覚(母親自覚得点)にも、妊娠期の肯定的な気持ちと夫の反応は関連していたことから、夫がともに喜んでくれることが重要であると言える。

3. 母親の特性・子どもの状況と母性意識・対児感情の関連

月齢1ヶ月の時点では、有職者でも仕事をしているの

は2名(0.3%)でほとんどの母親は、育児・家事中心の生活である。そのためか、健康自覚や睡眠満足では第1回調査、第2回調査ともに良好群と不良群はほぼ同数であったが、疲労感の強い母親の割合は減少していた(46.8%→26.3%)。第1回は、入院中であるが、産褥初期の身体面での疲労感が強いことが何え、育児においては、月齢1ヶ月ではまだ子どもの活動は哺乳と睡眠が中心であることが影響している。こどもの睡眠に関する項目が成長志向意識以外の母親意識と対児感情に関連が強いことから、この時期子どもがよく眠るかどうかは重要であるといえる。月齢1ヶ月での子どもの睡眠状況は、育児否定意識や葛藤意識が強くなることと関連し、子どもへの接近感情も鈍らせる。育児において、子どもがよく眠るかどうかは重要な因子となる。

子どもへの回避感情と母親の特性との関連は、初産に高く、母親の疲労とも相関が見られた。初めての子どもで、まだ1ヶ月という時期では育児の不慣れや子ども理解の不十分さが影響していると考えられる。今後の育児を通しての子どもとの相互作用から学習し変化していくことが予測できる。

4. 夫の存在

父親の育児参加や心理的サポートが育児中の母親には大きく影響するという報告は母性の研究⁴⁾、育児ストレスの研究で多く見られるが⁶⁾、今回の結果では関連はなかった。また、育児負担がそれほど大きな時期ではないことや、今回の対象者が「育児協力があまりない」は9名(11.8%)と少なく、夫の協力を得ていると感じている母親が多かったためと思われる。しかし、妊娠期の夫の反応は母親意識や対児感情の高得点に関連があることから、夫の支えが重なることは間違いない。今後の子どもの成長による育児の負担や、母親の職業復帰等により関連がでてくることも予測される。

5. 母親役割を果たす自分と社会的存在としての自分と葛藤

2回の調査ともに母親の葛藤意識は、育児否定意識や

成長志向意識と高い正の相関が見られ、子どもに対する回避感情とも相関していた。退院前と月齢1ヶ月時の変化でも葛藤得点は有意に高くなっていた。社会的志向と育児との葛藤が強いと母親役割の受容や育児負担感に影響してくることが考えられる。この葛藤は、専業主婦により多く見られるといわれている⁴⁾。今回の対象者も専業主婦が72名(75.8%)と多いため、今後の継続調査(月齢3ヶ月、8ヶ月、12ヶ月)でも、葛藤を中心とした母親意識の変化と関連要因に注目する必要がある。

6. 2回連続回答者による母性意識と対児感情の変化

産科退院前と月齢1ヶ月時の変化(図1)では、退院後子どもとの関わりが増えたことで、接近感情・回避感情ともに少しの上昇が見られた。育児肯定意識は変わらずに高く、成長志向意識はやや減少し、子どもに関心が向けられていることが伺える。その中でも葛藤意識が有意に高くなっていることは注目し値する。しかし、まだ、時期による変化は微小であり、これからの子どもの成長による育児状況の変化や子どもとの相互作用、職場復帰などにより変化がでてくることが予測される。今後の継続調査では、連続して最後まで回答を寄せてくれた対象者で変化を見ていきたい。

文 献

- 1) 原ひろ子, 館かおる編: 母性から次世代育成力へー産み育てる社会のためにー, 新曜社, 東京, 1991
- 2) 繁多進, 松下美貴子: 母親の母性と子どものアタッチメントの発達, 母子研究no 7, 44-57, 1984
- 3) 花沢成一: 母性心理学, 医学書院, 東京, 1992
- 4) 大日向雅美: 母性の研究, 川島書店, 東京, 1988
- 5) 池田弘子: 育児負担に関する研究ー育児負担感の時期別変化と母親の心理状態の関連ー, 母性衛生, 42(6), 607-614, 2001
- 6) 清水嘉子, 西田公昭: 育児ストレス構造の研究, 日本看護研究学会雑誌, 23(5), 55-67, 2000